

## ある女性(?)技術者のひとりごと

梶谷エンジニア㈱ 盛岡支店 佐藤辰江

「女性技術者」がテーマの原稿を、普段はあまり「女性」と自覚していない私が書くのはちょっと気が引けているのですが、なにを書けばよいのか迷っているうちに、もうメ切りです。なにはともあれ、いろいろ思いついたこと(!?)を書いてみようと思います。

私がこの建設コンサルタント業界で仕事をしている直接的なきっかけは、大学4年の時に、大学のOBである現在の上司から、今の会社を紹介されたことです。私の所属は理学部地球科学科でしたので、こういう選択肢はあっても不思議ではありませんでした。

改めて今、こういう進路を選択したきっかけを考えると、小さいときから地質に興味(だけ?)があったことに行き着くと思います。私の地元は古生層で有名なところで、自宅の近所には化石に詳しい方が住んでいました。それでも、自分では、積極的に化石収集のため山歩きしたり、地層を見にいったりということはありませんでしたが、小学生の時に、自分でウミユリの茎の化石を見つけて感動した覚えがあります。

大学4年の時に話を戻すと、今の会社の就職を決めるとき、私のことを良く理解している両親をはじめ、教官、友人みんなから「本当に大丈夫なのか?」と何度も念を押されたくらい、体力が…ある方ではありませんでした(いばれる話ではありませんが今も変わりません)。卒業研究も、野外踏査メインの内容ではなく、室内分析(微化石の有孔虫の分類)でした。

入社前、上司からは、「現場に出た次の日寝込んでしまうようだと困るけれど、そうじゃなければ大丈夫だから」とはいわれたものの、入社する

までは「(そこまではひどくないけれども)本当に大丈夫かなあ」と心配でたまりませんでした。なぜなら、入社前の私のイメージが「地質調査=地表踏査」で、毎日毎日踏査が続くとばかり思っていたためです。

いざ入社してみると、体力があった方がよいこと(外業)だけではなく、体力があまりなくてもできること(内業)があるとわかって、安心しました。といっても、やはり体力勝負のところが大いイメージは変わりません。それでも今、私は現場管理・地表踏査をして、報告書をまとめるまでの一通りの仕事をしています。

ただでさえ体力がない私がこの業界で仕事をしているのは、はたから見るととっても不思議に見えると思います(自分でも不思議に思うときがあります)。幸いにも(?),見かけによらず、比較的重量のあるものは持てる(しかし長時間は続かない)ので、コア箱などを持ち運びしているとびっくりされることも多いです。最近では「え?本当に現場に出てるの?」という視線に少し慣れてきて、そうは見えないところに優越感を持ちつつあります。それでも、技術者として考えたとき、現場を知らないと、成果品が作れないことを知っているのも、まだ体力が残っているうちに(?)現場のことを勉強したいと思います。

入社してから今までの仕事のことも、ちょっと書いてみましょう。

実は、ボーリングは、井戸掘削で実施するのは自宅の井戸で知っていたのですが、地質調査でも実施することは入社してから知りました。測量の仕方もわからなかったのです(私の学年から測量実習がなくなったのです。是非復活してほしいで



す)。最初は知らないことばかりで、今では普通に使っている用語も、当時は知らなくて「なんですかこれ？」と聞く度に「うるさい！」と怒鳴られっぱなし（あ、でもこれは今もあまり変わらない気がする…）でした。

仕事をしているといろいろなことがあります。港湾の仕事で櫓を誘導するときのことでした。いつもであれば2方向からトランシットを覗きながら、交互に「〇〇方×m右（あるいは左）」とトランシーバーで言い合います。私がこの誘導の手伝いに行った時には「声でわかるから〇〇方はいらない。間違えにくくていいね」と言われました。ただそれだけのことでしたが、私にとっては（普段港湾関係の業務に関わる機会がないから余計に）役に立ったことが、内心とても嬉しくて仕方がありませんでした。また、私がなまって話してしまうためか、地権者さんのお宅に行った時は優しく対応してもらえることが多く（お茶やお菓子のほか、おみやげをもらったりすることもある）、帰り道まで心配されてしまいます。また、工事現場で作業するときには、いろいろその現場の情報を教えてもらえます（例えば「熊が出る」とか、「あの山にはキノコがでる」とか）。

一方で「責任者つれてこい！（女の）お前なんかじゃ話にならない」と言われ、おまけに現場作業を中止・撤去しなくてはいけなくなったとき、あまりのことで上司や施主に報告する際、電話口で泣いてしまったこともあります。夏の真っ盛りに、蛇が怖くてトイレが近くなるのをおそれ（？）、水分を必要以上に控えた結果、軽い日射病にかかり、座り込んだこともあります（しかも施主である役所の人の目の前でした）。そのほか、ここ数年間で一番、支店内の車をぶつけているの

は、実は私なのです（本当に自慢できないことばかりだな…）。

こういう失敗をしたときには、「だからおまえは…」とは言われることはあっても、「だから女は…」という言葉は、上司から言われた記憶がほとんどない（私の記憶にないだけ？）のは、すばらしいことだと思います。「たまには作業服だけじゃなくて、きれいな格好してきたら」と言われるくらい、私が普段あまり「女性」として自覚していないのもあるのでしょうか、上司は私を「女性」としてではなく、「一技術者」として評価しているのでしょう。私の入社が決まってからは、どうしたらよいか、支店内でかなり話し合っ、関係者（特にボーリングの機長さんと先輩女性社員）には事前に説明したようです。また、仕事の内容にしても、私に適したものを上司は選択しています。こういう内部調整があるからこそ、今の私があるのだと思います。

私の上司は「女性」という目では見ないとしても、業界全体から見ると、まだまだ「女性」ということで不利になりやすい傾向があると感じています。私があるとある会社に技術社員での受験をしようとしたところ、受験直前に女性の技術の方が入社1年ほどで結婚退職したとのことで、ダメになったことがあります。

ついこの間、大学の恩師に言われたことでもあります。ある意味では、私の行動・実績（？）が今後の業界の女性技術者の数を決めていることになり、こんな私でも非常に責任重大な役目を背負っているのだな、と思います。ただ、こういう立派なことをいつも気にしていたら気が減入ってくるので、とにかく大きな「失敗」をしないように気をつけて、仕事をしていきたいと思っています。

